
異世界で魔犬な生活

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で魔犬な生活

【Nコード】

N8596X

【作者名】

f u m i a

【あらすじ】

自殺した後に魔犬へ転生……。この世界とは違う、あり得るかもしれないパラレルワールド。科学と魔法が共存し、世界は不景気を知らず宇宙を目指して邁進し、日本は技術でも魔術でも経済でも一流の超大国として闊歩する。そんな世界で魔犬として生を受けたカイトは、魔法もなく、世界同時多発不況の最中落ちぶれていた日本、という別の世界で暮らしていた頃の記憶を人知れず抱かえ込みながらも、最愛のパートナーであり、マスターである美久の使い魔として魔法学園の平和を守る為に仲間達と共に尽力する。

プロローグ

第一の世界、201X年、日本国某所。

あるアパートの一室に、一人の青年がいた。

夕闇の色が濃くなり、部屋の中がとても薄暗くなっているのにも関わらず、彼はぼんやりとただ一点、これから自分の命に終止符を打つであろう、天井に打ち付けた鉄製の鉤に結び付け、輪を作るように反対の端を結んだ一本の太いロープの黒い影を見つめていた。

コミュ障、内気、根暗、チビ……。顔面偏差値こそ並以上の物があつたが、その他に関しては、その青年はおよそ社会生活に支障をきたす程負の要素で満ちていた。

加えてこの未曾有の経済危機である。それまでは大学生という肩書きがあつたが、いまや就活浪人3年目、収入も社会的な居場所もほぼ完全に無くなり、彼は自分の人生を悲観どころかとことん絶望していた。

彼以上に紆余曲折を経てきた年長者なら、やる気と根性さえあれば案外やり直しも利くと云う事を経験上心得ているから、この程度で自殺なんて、と呆れたり非難したりするかもしれない。が、生憎彼はそこまでの経験も視野の広さも無かった。紛いなりにも敷かれたレールの上を走って行かざるを得なかった若者にとって、一度でも脱落すると高確率でリベンジする事が出来ない現在社会の仕組みの中で墮ちていく事は、絶望に他ならなかったのである。

青年は静かに立ち上がると、踏み台代わりにした積み重ねた百科事典の上に足を乗せた。

ロープに首を掛けると、建て付けの悪い窓の隙間から、階下の畦道を散歩しているらしい飼い主の女性の、

「ほら、チャッピー！おいで！」
と呼ぶ声とキャンキャンと鳴く小型犬か子犬の泣き声が漏れ聞こえてきた。

犬か……。犬っていいなあ。

喉仏で粗くザラザラとした安物の紐を触りつつ、青年は無意識に考えた。人間と違って、大人になっても家族の一員としていつまでも置いて貰える。警察犬や介助犬、タレント犬等の例外はあるものの、大概の犬は愛玩用として一生を終え、お金を稼ぐ為に働きに出る必要もない。野良になつたら野垂れ死ぬまでだろうが、それは人間だって同じ事だ。違いがあるとすれば、野良犬は人に拾って貰える可能性が無くもないが、住所不定の浮浪者が社会に受け入れられて社会復帰する事は、その手の支援組織の伝手が無ければ一生叶わないと云う程度の物である。

いいなあ、犬。犬、いいなあ。

そう思いながら、青年は足元の百科事典を蹴り飛ばし、宙へ舞い上がった。

何処でもいい、もしも生まれ変われるなら犬に成りたいなあ……。

ロープが首に食い込む。ただでさえ粗いロープの表面が皮膚に食い込み、息苦しさと共に首まで干切れるかと思う程の強烈な痛覚が青年を襲った。

『そんなに犬になりたいか？』

意識が飛んで目の前が真っ暗な闇に包まれていく最中、彼の頭の中にこんな声流れ込んできた。脳の中へ直接語り掛けてくるような、不思議と神々しい感じがする低い男の声だった。

犬に……なり……たい。

『そうか、宜しい。では汝の願いを叶えてやろう。』

青年の首が力尽きるように項垂れ、四肢がだらりと垂れ下がる。

彼の体の真下には、漏れ出した尿が板張りの床の上に丸い水溜まりを形成していた。

そうして青年は、誰にも気付かれる事もなく息を引き取った。

>>犬

真つ暗だ。何も見えない。だけれども暖かい。安心出来る温もりがここにはある。

それもその筈だ。ここは母さんの胎内なのだから……。

突然、締め付けられるような衝撃が俺を襲った。そして訳が分からぬまま、俺は頭から胎盤の外へ無理やり押し出された。

誰かが何かを叫んでいるが、その喧騒さえ意識する余裕が無くなる程体が締め上げられていく。

狭い所に無理やり押し込まれたと思ったら、突然とても広い空間に押し出された。未だに目の前は暗いままだが、鼻や口から空気が入って来るのがわかる。突然肺が空気でいっぱいになって胸が苦しい。俺は思わず息を吐き出した。

キャン！キャン！キャン！

「おお、生まれた！3匹目が生まれたぞ！」

そう叫ぶ人間の男の声が聞こえる。目は見えないが、臭いでそれが人間だと分かった。

俺は、先に生まれた兄貴達の声と母さんの臭いを頼りに、暗中模

索で母さんの姿を探した。

何とか母さんを見つけて次兄の左隣、向かって母さんの頭が向いている方に並び、母さんの腹の下に潜り込むと、俺はホッと一息を吐いた。

これが、俺が犬として初めて体験した事だった。

生まれたばかりの子犬の一日というのは、思っている以上に至極退屈なものだ。

目が見える訳でもないから彼方此方へ動き回れない。必然的に母さんのいる寝床のボール箱で大人しく食っちゃ寝しなければいけない事になる。

ただし、寝る時はいいが俺は5犬兄弟の真ん中なので、母さんのおっぱいを吸う時は兄貴達にも弟共にも毎回気を遣う羽目になる。五つ子なのだから乳を吸う順番とかどうでもいいではないか、と内心想うものの、口に出したら長兄や次兄から蹴りを食らうのが目に見えるので黙りを決めるのが常態になっていた。お陰で空気を読む事だけは秀でる事が出来るようになったと思う。

生まれて一月ばかり経った頃だろうか、ある日俺達が飼われていた家に、沢山の客人が訪れたような雑音が、遙か遠くの居間らしき方から聞こえてきた。

「どうやら客人達は会話の様子から3組の家族のようであり、
「ねえ、イチローオジサン、ヨシコオバサン。ワンちゃん早く見せて！見せて！」

「まあまあ、落ち着きなさい、ミク。居間見せて上げるからね。さあ、こつちに来てご覧。」
という、どんだん近付いて来る足音と共に聞こえてくる、飼い主と客人の一人である小さな少女らしき声の主との会話から、どうやら客人達は皆飼い主夫婦と親しい間柄の人間達のようにだった。

扉がバタンと開かれる音が部屋中に響く。そしてそれを合図するかのようにはたはたやかと軽やかに跳ねるような慌ただしい足音が聞こえ、それがやんだ途端、頭の上からさっきの女の子の声が真上から反響した。

「わあ！可愛い！」

不意に、俺は誰かに両側から腹を抱かえ込まれた。

その手はそのまま母さんや兄弟達から俺を引き離さんともするかのように俺の体を天高く持ち上げていく。

「わあ、お母さん！お母さん！怖いよ。助けて！」

無駄な抵抗だと頭では解っていて、俺は母さんに助けを求め、誰かも判らぬ人の胸の中でジタバタと四肢を振って精一杯の抵抗をした。だが初めから母さんも承知の上だったのだろう。母さんは黙ったまま俺の方を見上げているようだった。

抱き抱えられた俺の頭上から女の子の声が聞こえる。

「オジサン。この子、貰っても良い？」

「おっ！ミクはこの子にするのかい？いいとも、持って行きなさい。大切にするんだよ。」

「うん！」

女の子は、俺を胸にしつかりと抱き締めたままトテトと走りだしたようだった。体の揺れがダイレクトに伝わり、母さんと兄貴と弟達の鳴き声が、臭いが、温もりが、遠ざかって行く。

寂しさに耐え切れず、俺は思わずクウーンと泣き声を上げた。

突如、女の子が俺の背中をそつと撫で始めた。その感触は毛皮越しでも解る位温もりと優しさに溢れていた。

それがあまりにも気持ち良かったから、何だかんだ言って俺もまだ餓鬼だったから、いつしか俺は眠りに落ちてしまった。

>>カイト

第二の世界、2030年4月中旬、日本国立中央魔法学園高等部生寮第1号棟、瀬川 美久の部屋。

「カイト！もう朝よ、起きなさい！」

朝っぱらから部屋中に響き渡る美久の五月蠅い怒鳴り声で叩き起こされた所為で、俺は寢床に敷かれた毛布から飛び上がった。

「五月蠅いな、起きたよ！」

開口一番文句を言うと、我がマスターは顰め面をした。

「カイト、あなたね。わたしの使い魔として大分経っているんだから、もう少しそれらしい自覚を持って頂戴！」

「ハイハイ……。」

生返事を返しつつ、いつの間にか彼女に引き取られてから5年以上経っている事に思い当たった。当時は10歳、生まれたばかりだった美久と俺も、今や15歳の高校生と5歳の子犬である。おっと、今俺がいるこの世界での魔犬は10歳で成犬とされている。だから5歳の子犬と云う表現は誤記ではないぜ。悪しからず。

「ほら、さつさと御飯食べて！わたしが遅刻しちゃうわ！」

「ほーい！」

投げつけられるようにマスターから渡されたドックフードを盛りだされた円形の青い器を受け取ると、俺は茶色いドッグフードの山に顔を突っ込んで一気に平らげた。

食事を終えると、俺は美久によって魔術調教用の首輪を付けられる。さあこれで準備は万端だ。

「行けるよ！美久」

「じゃあ、出掛けるわよ！」

「よしきた！」

さあ、今日も一日頑張ろう。

第一話：俺の日常

>>カイト

エレベーターで1階まで降り、急いで1号棟の外に出る。

建物の外に出ると、正面に2号棟の、向かって左側に当たる南側に3号館の玄関口がある。それぞれの建物は煉瓦敷きされた1万平米の正方形の形をした中庭をコの字を描くように取り囲んでいた。そして右側、北の方向へ目を向けると中庭と表通りを仕切る高等部寮の大きな黒い鉄製の門扉が目に入る。

上を見あげれば、三方向を20階建ての大きな寮の建物が群青色の空を真四角切り取っている。今日もいい天気だ。

いい気持ちで空を見つめていると、風に流されてプカプカと気持ちよさそうに高みに浮かぶあの白い雲まで届きそうな程の大声で美久が叫んでいるのが、嫌でも俺の俊敏な耳の中に入ってきて来る。

「カイト、早く！変身よ！」

まるで拡声器を耳元に当てられて絶叫されたかと思える程だ。そこまで大声で怒鳴らなくてもちゃんと聞き取れるのに……。犬の聴覚舐めるなよ。吃驚し過ぎて頓死したらどうするのだ？御主人様よ。

まあ、ポーっとしていた俺も悪いのだけれどな……。

「よし、じゃあ、変身するぜ！」

俺は掛け声を掛けると、四足を踏ん張ってバネのようにしならせると天高く飛び上がった。そして空中で1回バク転をすると、俺はフルサイズの大きな3ボックスセダン型のシルバーメタリックの乗用車に変化した。俺が前世を人間として過ごしていた世界で走っていた200系クラウンという車だ。勿論、今いるこの世界では走っていない車である。

というより、この世界ではガソリン車その物が絶滅してしまっている。皆魔力補助で動く電気自動車だ。超速充電と超容量蓄電池、長距離高速走行対応高出力モーター、急速充電施設等のインフラ整備……。そうした壁を人類は突破し飛躍的な進歩を遂げたのだ。それだけじゃない、放射性物質の安全な最終処分及び再生技術が確立されてからは、核融合による原子力で動く物も一般に普及しつつあった。

俺は左側にある助手席のドアを勢い良く開けると、我が主を俺の中へ招き入れた。

「カイト、あなた、時々変な物に変身するわよねえ。」

美久はそう言って溜息を吐くと、座席の上に座り込んだ。正直一言多いよ！と言わざるを得ない気がする。まあ、言ってみた所で、俺達犬の言葉は人間にはワンとかキャンとかワオーンとしか聞こえないだろうから口にするだけ無駄だろうが……。

だが、しかし……。

「何？何か文句があるの？カイト。さっさと行きなさい！GO！」
何となく此方の意思も向こうにも通じているような感じがするのだから、世の中不思議な物である。

俺はグルルと唸って気合を入れると、門に向かって駆け出した。

魔犬とか、魔猫とか、そういった魔法能力を所持する生物には、当たり前だけどそういう魔術的な先天性の能力を所持している。俺の場合、変身能力だ。

だが、ただの変身能力じゃない。道具限定とはいえ、一度でも記憶に留めた物ならばどんな物にも、それが自分より大ききろうが小さきろうが関係なく、その機能まで完全に再現する事が出来るのだ。だから俺のマスターである美久が遅刻しそうであればこうして車に変身して送ってやれるし、もしも彼女が杖や文房具等を忘れて窮地に陥れば、それに変身して急場を凌がせる事だって可能なのだ。

しかもそうした物の記憶は、今までだけではなく前世の物であっても何故か適応される。そういう訳でこの世界には存在しない筈の物でも変化する事が出来るのだ。

……と、大見得を切ってみたが、勿論限度つて物がある。流石に俺でも100人以上乗れるジェット機のように超高速で空や宇宙を飛び回る飛行機とロケットや、深い海の底へ潜る潜水艦や地中を掘り進む巨大掘削機のような特殊環境で働く大型機械、2両以上の編成の列車、目に見えない位小さなナノマシンになる事は出来ないぜ。あくまで地上で日常的に活躍している普通の道具に限られる。残念だけどな。

大通りを、国立中央魔法学園、美久が通っている国内で一番権威がある幼稚園から大学まで一貫教育を行う魔法学の専門家養成機関へ向けて疾駆する。

郊外にあるとはいえ、都心に近い立地的な要因も大きいのだろう。広い中央分離帯があり、一直線に伸びる片道3車線の大きな道路の両側には、10階よりも高いビルが林立し、歩道や車道には人が溢れ、活気に満ちている。でも、だからといって渋滞して立ち往生する訳ではない。最新の信号システムと交通環境整備事業によって、極稀に起こる交通事故と工事業を原因とする物を除いた自然渋滞は過去の物になったのだ。

交通だけじゃない、近代科学技術、医学生物学、魔法学、その他様々な方面で日本国は大躍進を遂げていた。バブル期の実態のない偽りの経済繁栄から、実態の伴うそれへの転換を上手く成し遂げ、島国ながら世界一の経済国として念願の常任理事国入りも果たし、強国の一つとして世界に君臨する事になったのである。俺が前世を過ごした世界の日本とは正反対だ。

バブルが弾けた途端に活力を失い。数だけが多い団塊世代が蔓延って若者をないがしろにし、結果的に行き詰まると素晴らしい技術

という過去の遺産を切り売りして食い潰し、移民や隣国、果ては世界からATMとして集られ、売国奴と共に失墜していった国と、それを転換期と前向きに捉えてさらなる発展を遂げて名実共に最強になった国。魔法の有り無しは別として、世界が違っただけで同じ様な民族が同じ様な歴史を辿ってきた筈なのに、どこでどうしてここまで差がついてしまったのだろうか……。不思議でならない。

そんな魔犬らしくもない事をぼんやり考えつつ走っていると、

「よっ！雑種！」

と言う、聞き慣れた雄犬の声が左後から聞こえてきた。

振り返るまでもなく声の主は大体想像出来たから無視を決め込もうと思ったが、そいつは俺の左隣にぴったりと張り付いてきた。紅色が映える派手なスポーツタイプの大型のMTのオートバイに変身した柴犬のムックと、その上に跨る彼のマスターの高町 柑奈という、肩まである長い茶髪を結んでツインテールにした貧乳美少女である。ヨークシャー・テリアとスコティッシュ・テリアの混雑種で四輪車に変身した俺と、セミロングの艶のある黒髪の美少女で、しかもHカップな巨乳の我がマスターとは好対照である。

「おはよう、美久！」

「あら、おはよう。柑奈。」

御主人様達が和やかに朝の挨拶を交わす中、当の俺達は犬語で口喧嘩をする。

「五月蠅いな、和犬！雑種は雑種でも此方は血統書付きのテリア犬だ！英国紳士舐めるな！」

「はあ？英国紳士だって？聞いて笑わせらあ！先祖はイギリス生まれでも、お前は生粋の日本生まれの日本育ちじゃないか。」

「うっ~~~~っ！兎に角、雑種言っな　！」

「じゃあ、チビ！」

「うわ　　ん!!」

チビ、と言われて俺は思わず泣きそうになった。というより泣いた。ただでさえ短足胴長で分が悪いのに、向こうは同じ年頃の子犬の割には大柄、こっちは小柄である。優位に立てたところで精々、大きくなり過ぎたムックと違い、小さくて可愛い俺はマスターの胸に抱かれる事も、ベッドに潜り込んで縫いぐるみのように彼女の懷で添い寝する事も許されている事を心の中で誇示する位しか優位に立てる物が無い。悔しいが勝てる気がしない。

そんな中突然、

「ねえ、美久。学校まで、どっちの使い魔が早く到着出来るか、競争しない?」

と、柑奈が突飛な提案をした。美久も最初こそ、

「止めなさいよ。あまり感心できないわ。それに、わたし、風紀委員よ。出来る訳ないでしょう?」

と諷めたものの、結局根負けして友人の言に乗る気になったようだった。

「おい、どうするよ?」

ムックが俺に囁いた。

「俺は何時でもOKだぜ!」

勿論、俺だってマスターがやる気ならば異論はない。

「望むところだ!後悔するなよ。」
と受けて立った。

そして柑奈の、

「よーい……ドン!」

と言う掛け声を合図に、俺達は全力で加速した。

ムックは、

「ハイド　　!!!」

と声高く叫ぶ柑奈を乗せたまま、前輪を高々と上げるジャックナイ

フをしながら急加速した。バイクの加速力には及ばないものの、彼のすぐ後ろを追跡するように、俺も後輪にホイールハウスを押し付ける感じでケツを下げるとギアを落として一気にエンジンを全開させた。

出足こそムックに負けるが、最終的な到達加速度と最高巡航速度は俺の方が速い。あつという間に俺はボンネット分彼の前に飛び出し、競り合うように並走する。

ところが哀しいかな。車と車の間をすり抜けられるバイクと違い、自動車は他の自動車を車線変更して避けなければ追い越す事が出来ない。もしも道路いっぱいになり車が並走していたら、その内の一台が退いてくれるまで大人しく後ろで待っていなければならぬ。そんなこんなしている内に、ムックと柑奈の後ろ姿は車の流れの中へと消えて見えなくなっていく。

そうして、今日も俺は見事に惨敗した。学園の正門の前で、バイクの変身を解いて赤毛の柴犬に戻ったムックが得意げな顔をして、やっと到着した俺を見つめているのが何とも腹立たしい。少なくともここ50戦位ストリートレースでは連続で負け続けている筈だが、多過ぎてもう数える気力もない。

俺は美久を下ろすと、自分も元の魔犬の姿に戻り、地べたに四つん這いに座り込むと、体を冷ます為に舌を出してハアハアと吐息した。正直、物凄くスタミナを消耗するので疲れたのだ。

出来れば少し休みたいのだが、現実はそのよう甘やかしてはくれないらしい。

「こら、カイト！何座り込んでいるの？置いて行くわよ。さっさと歩きなさい。」

と、我がマスター美久は俺をしきりに責付いた。

「嫌だ！疲れた！もう歩けないよ！抱っこ！抱っこ！」

俺は大声で喚いて美久の足元をコロコロと転げ回りつつ駄々を捏ね

た。

「抱っこ！抱っこ！抱っこ！抱っこ！」

「あ、もう、分かった、分かった。そんなにキャンキャン喚かないの！本当、甘えん坊なんだから。」

俺の想いが通じたのか、美久はしゃがみ込むと両手でそつと俺の胴体を持ち、その豊かな胸の中に抱き寄せた。ぶにぶにとして弾力もある柔らかい乳房に顔を埋める感覚が心地良い。こうして頭を撫ぜられながら、赤い軽量プラスチックのフレームのスタイリッシュな眼鏡を掛けた彼女と目を合わせていると、自然と優越感のよくな気持ちに浸る事が出来る。使い魔とはいえども所詮、俺も愛玩動物と云う事か……。

広い高等部の敷地を美久に抱き抱えられつつ進んで行く。目の前には5階建ての近未来的な雰囲気を漂わせた銀色に輝く大判の一枚硝子を多用した校舎が聳え立っている。幼稚園から大学まで共学で一貫教育を施す巨大学校法人の高等部の敷地なのだから、大きくて当然のような気もするけれども、やはり魔法技術のエキスパートやスペシャリストを養成する為の日本で唯一の専門教育機関であるという先入観を与えられているからか、中々に立派に見えた。

勿論、魔法学とか魔術概論、分析魔法学、使役魔法学、魔術工学、幾何魔方陣理論分析学……といったような魔法関連の勉強の初歩を学ぶ為の学校なのだが、普通科で勉強するような、現代文学、古文、漢文、数学、英語、生物学、物理学、化学、地学、政経学、地理学、歴史学、哲学、論理学、保険体育と一通りの学科も学習する。そして魔法よりもそれ以外の勉強に一日の大部分を割く。結果的に魔法以外ではお呼びでない俺達は必然的に邪魔者になってしまう。

そんな使い魔達が必要でない間、学園では学生たちのそれらを校舎の一角で纏めて預かるといふサービスを行なっている。云わば使

役魔獣の保育園だ。

俺を抱いたまま校舎の中に入ると、下駄箱で上履きに履き替え、そのまま廊下を進んで校舎の1階の隅に造られた保育スペースへ美久は向かった。そこで受付の若い女性の職員に、彼女は俺を委ねた。「じゃあね、カイト。午後の魔法の授業の前に迎えに行くから、良い子にしているのよ!」

「解った!する!」

尻尾を上へ上げてフリフリと振りつつ、美久にバイバイをする。彼女もまた俺に向かって軽く手を振ると、そつと背を向け柑奈と共に何処へと去って行く。入り口の自動ドアの硝子越しにじつと見つめていると、廊下の角を曲がったのか、急に彼女等の姿は見えなくなってしまうた。

さて、何して遊ぼうか？

ムックとの競争で思いの外早く来てしまったからだろうか、普段は皆で取り合いになるような玩具も、幾つかは誰からも占有されずに灰白色の大理石の床の上に放置されている。しかも今一番人気があるスケボー、その内の一台の橙色の奴がまだ壁に立て掛けられているのが目に入った。

俺は一直線にスケボーの元に駆け寄ると、それを床に倒し、前足を乗せ、勢いを付ける為に後ろ足で床を蹴って走りだした。

トトトトス イ、トトトトス イ……。

前足をスケボーの後ろの縁に添え、後ろ足で走りながら押しまくる。本当はボードの上に立ちたくて仕様が無いが、短足胴長だと中々難しくもどかしく感じる。

だけれど、これはこれで何か楽しいな、と思える自分もいる。何だかよく分からない。

「邪魔するぜ！」

突然、そんな声と共にムックが俺の押ししているスケボーの上に飛び乗って来た！途端にボードの重さが増え、ボードの速度が鈍る。

「おい、カイト。何してんだ？遅くなつたぞ！」

お前が乗っているからだろうが　　っ！！！！降りろ、馬鹿！

文句を言おうと口を開いたその時、

「あらあら、相変わらず仲が良いのねあなた達。」

と茶化す雌犬の鳴き声が聞こえてきた。声のした方を振り向くと、そこには淡い銀色の毛並みが眩しい御年9歳のプードルのルカ姐さんがニコニコしながら立っていた。

「おはようございます。ルカ姐さん。」

俺は歩みを止めて彼女に挨拶をした。

「でも、俺達そんなに仲がいい訳ではないですよ。」

「あら、そうなの？」

「そうですよ。」

俺は保育園にいる雌犬の中で一番の美貌を誇る、憧れのルカ姐さんに声を掛けられたのが嬉しかったので、ついスケボーから前足を離してしまった。

気が付いたら、俺の目の前からムックと共にスケボーが消えていた。

この中央魔法学園には、使い魔を使役する授業や訓練を行う初等部高学年から大学までの校舎や敷地の一角に必ず魔犬や魔猫等の愛玩魔獣を生徒や職員から預かる保育施設が併設されていて、それぞれに保父さんや保母さんと称される世話専門の職員が数十人在籍している。

その中に、群山さんと他の職員から呼ばれる、いつも薄鶯色の縫れた上下の作業着を着た、少し頭頂部が禿げた小太りの中年男性がいる。

このおっさん、いつも作業着のズボンの尻側のポケットに、ポケットが膨らみ過ぎてビロンビロンになるまで細かく刻んだビーフジャーキーを突っ込んでいて、俺達が強請るとそれを一枚だけ分けてくれるのだ。

今日も群山さんは後頭部を掻きながら俺達の前に姿を現した。勿論、ポケットの中は干し肉でパンパンになっている。

俺は群山さんに近付くと、肉を貰う為に後ろから彼の尻の辺りに飛びついた。

「ねえ、ねえ、ビーフジャーキー頂戴！頂戴！」

「ん？おや、お前、瀬川 美久ちゃんの所のカイ坊じゃないか。」
群山さんは足元にいる俺に気が付いたのか、振り向くとそう呟いた。

「なんだ、またこれが欲しいのか？全くお前はこれが好きなんだなほれ、やるぞ！」

「やった　　！わ　　い！」

おれは群山さんがポイッと放り投げたビーフジャーキーの欠片を口で受け捕るとモグモグと頬張った。美味しい。やっぱ肉美味しい。美久はいつも栄養価こそ高いけど不味いドッグフードしかくれないからな。こうやって保父さんや保母さん達が分けてくれるお菓子やおこぼれが俺の日々の楽しみの一つになっている。

お昼にも、アルミニウムの皿に盛られたドッグフードやキャットフードが給食として出て来る。ただ、澱粉やヘテロ多糖をベースにして、必須アミノ酸と必須脂肪酸とビタミン類の他にほうれん草か何かのペーストを練り込んでフリーストドライ処理をした、変な黄緑色をした球形のペレットだったので、味はそれ程悪くないのに頗る見た目が気持ち悪い食べ物だった。何をどう頑張っても、犬猫の餌とは思えず、はっきり言って錦鯉のそれと形容した方がしっくりとくる代物なのだ。

見た目からして食欲が減退するが、やはり腹の虫には敵わない。結局食べてお腹いっぱいになり、満足して昼寝をする。

午後になると、魔法の授業で使役する為に、美久と柑奈のクラス
の学生達が挙って俺達を迎えに来た。

騒がしい雑踏の中、臭いと彼女の足を頼りに俺は美久を捜して徘徊する。そして何とか彼女の姿を見つけた俺は彼女の胸の中へ飛び込み、そのまま彼女によって俺は魔法学実習室へ連れて行かれた。

実習室で行う使い魔の使う授業は、的確に指示通りに使役魔獣が動くように、変身や攻撃などの魔法能力の向上を図る訓練の他、主人の云う事を聞かせる、お座りとか伏せとかお手とか、基本的な躰を施す訓練を繰り返してやらせられる。

正直言つて、既に楽勝に出来る程度の事を、毎度毎度うんざりする程反復してやらされるから退屈で仕方がない。しかし、

「カイト、お手！」

「はい！」

と命じられた通りの動作を遂行する度に、

「よし！ご褒美！」

とおやつのお菓子が与えられるので、少なくとも俺はその瞬間の為だけにこの授業に真面目に取り組んでいた。

そうして放課後になると、美久は高等部の風紀委員の活動の為、校舎の4階、生徒会室の真下にあつて委員の詰所となっている部屋に向かい、俺も一緒に付いて行く。

そして手紙などの書類を言われた場所や人へ届けたり、パトロールをして風紀を乱す不逞の輩を吠えて威嚇したりと、他のメンバーの使い魔達と一緒に風紀委員達の手伝いをするのである。

鋼鉄製の重厚な両開きの扉を開け、他の教室に比べてもそれなり

に広い風紀委員会室に美久と共に入ると、1人の女性教師と2人の女生徒、そして3人の魔犬が寛いでいるのが目に入った。

女性との内の一人は今朝も会った高町 柑奈で、足元に彼女の使い魔である柴犬のムックが座っている。もう一人、腰まである綺麗なストレートロングの綺麗な黒髪に、制服がパツンパツンになる程の爆乳を持つ美少女は知恩院 麗美という3年生の風紀委員長で、その腕に抱くプードルのルカ姐さんのマスターである。

最後、紫掛かった黒いスーツをビシツと着こなした、長い髪を頭の後ろで団子に結んだ30半ばの面長の美人が、この風紀委員会の顧問を務める鏡 智子教諭である。そして彼女のスレーブとして、長年公私ともにパートナーであるのが、俺達の長老にして御年30歳、漆黒に輝く毛が今なお凛々しい、元警察犬のジャーマン・シエパードの光圀公である。

他にも3年生男子の副委員長とその使い魔の三毛猫とか、かなり沢山のメンバーとスレーブ達が居るが、同じ犬だからという至極単純な理由で、俺達はこのメンバーでいつも固まっていた。

俺が美久の胸元から飛び降りると、御老公とムックの所へ向かった。

「遅れてすみません。」

俺がそう詫びると、光圀公は鷹揚に構えながら、

「別に構わんよ、カイト。特に詫びる事もあるまい。わしらも今仕方来たばかりだし。」
と穏やかな口調で応えた。

そんなこんなで帰宅時間になると路線バスに乗って、美久と俺は寮の部屋へ帰還する。

美久が寮の食堂へ行っている間に用意された夕飯のドッグフードを食べ、彼女が宿題をする為に机に向かっている傍らでソフトボールを追いかけて戯れている内に、入浴の時間になった。

美久は着替えとバスタオルを2枚用意すると、服を脱いで裸になり、

「カイト、おいで！お風呂に入るよ。」

と俺に向かって呼び掛ける。

「ほいさっ！」

とその場で飛び跳ねると、俺は飼い主の所へ向かって駆け出した。

寮の部屋の浴室にはペット専用の洗い場が設けられているので、俺は基本的に毎晩美久と一緒に風呂場に入り、美久が体を洗う合間にシャワーのお湯を掛けて俺も軽く埃を流して貰うのである。

本当は月に一度しか使わない犬用シャンプーですつきりしたいのだけれど、犬は皮膚が繊細で弱いから、月一以上のシャンプーの使用はいけないのだそうだ。以前、いつもお世話になる掛り付けの獣医のちよび髭先生が美久にそう説明していたから、たぶん本当の事なのだろう。物足りないなあ、と思いつつも今夜も頭の上からお湯を掛けられる俺なのだ。

風呂から上がると、美久によってバスタオルで毛に纏わり付いた水分を拭われる。そうしてさっぱりすると、俺は寢床になっている淡い水色の一辺50cm程の立方体の横倒しにされたカラーボックスの中に入り、腹這いになって体を丸め、そつと目を閉じた。

美久はまだ椅子に座ってテレビを見ているらしいが、よく分からない。気が付いたら朝が来て、また美久に叩き起こされるだけだ。

そんな感じの俺の日常。

第二話：俺に求愛？

>>カイト

「ブンブンブブン！ブンブンブブン！」

「ウ　　ッ！ファンファンファン！」

放課後の風紀委員会室。白い大理石のタイル敷きの床の上で、それぞれ10分の1サイズの車の玩具、丁度ドリフト専門のラジコンの模型と同じ大きさに変身した俺とムックは、鬼ごっこならぬ『交通警察24時ごっこ』をして遊んでいた。

ド派手な装飾と電装を付けまくった珍走団の違法改造車を、やる気のないY31セドリックな覆面パトカーがまったりと追い駆ける、実に平和的な追い掛けっこである。

「パラリラパラリラ〜」

「ウ　ウ　、待て、待て　　！……ガッ!?」

「……………?」

いきなり誰かに頭を押さえつけられ、吃驚した拍子に俺は元の姿に戻ってしまった。異変を感じたのが、ムックも立ち止まって変身を解き、俺の方へ振り返った。

視線を上にとやると、右の前足をお手でもするように俺の頭の上に置くルカ姐さんがそこにいた。気の所為か、不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、俺の顔をメツと睨んでいる。折角の美人が台無しだ。

「カイト、それにムックも……。あなた達、いい加減にきなさい。ルカ姐さんの口調は静かだったが、鈍感な俺達でも容易に察せられる位怒気に満ちた物だった。

「あなた達、まだ遊び盛りの子供だからはしやぎたいのは分かるけれど、マスター達の迷惑になるから静かにきなさい！」

言われて周りを見回してみると、学生達が部屋の彼方此方で忙し

く立ち回り、仕事に勤しんでいるのが見て取れる。

それまで黙っていた黄門様も、好々爺らしくにこやかに微笑みながら、

「まあまあ、ルカや。そう目を三角にする事もあるまいよ。……ただ、カイトもムツクも、もう少しTPOを弁えなければいけないかったかもしれない……。」

「ご尤も、その通りです御老公。確かに騒ぎ過ぎた感がある。でも、思い切り遊びたい。俺はムツクの方へ振り返り、彼にこう提案した。「グラウンド、行こう！」

「賛成！」

風紀委員室の扉には、下の方に蝶番で留められたプラスチックの板、もとい犬猫用の出入り口のドアが造られていて、頭で押してパカパカと揺らす事で、俺達のような犬猫でも人間に開けて貰わずとも部屋の内外を自由に行き来する事が可能ようになっていた。

先に穴を潜って廊下へ出ていったムツクに続き、ドア板を頭で押し上げて上半身だけ部屋の外へ乗り出すと、

「競争だ！」

とだけ言い残して、彼は俺から見て右の方へさっさと走り去ってしまった。

「わあ、待つてよ　！」

俺も慌てて廊下に這い出すと、ムツクの尻尾を追い掛けた。

階段に向かって廊下をピョコピョコと駆けて行く。そしていざ、階段と廊下との交差点に差し掛かった刹那、右側手前にある上階とを結ぶ階段の所から、鮮やかなゴールデンベージュ色をした一匹の子犬が突如俺の目と鼻の先に飛び出して来た！

「危ない！」

俺はそう叫びながらも、咄嗟に避けられる空間を直感的に把握し、階段と反対側、向かって左手にある廊下の窓の方へ飛び上がった。そうして、辛くも正面衝突の危機は避けられたが、代わりに俺は廊下の窓下の壁に激突し、鼻先に物凄い衝撃と激痛を感じて七転八倒する羽目になった。

前足で鼻を押さえて蹲っていると、

「だ……、大丈夫ですか？」

と、少し気弱な印象を受ける細い声が頭上から聞こえてきた。瞼を開けて声のした方へ目を向けると、先程ニアミスし掛けた奴だろうが、夕日を浴びて金色に輝くフワフワとした毛並みが愛らしい、俺と同じ位の年頃のジャーマン・スピッツの女の子が不安気な表情で俺を見下ろしていた。

俺だって男の子！女の子を前で何時までも無様な格好を晒すのは本分ではない。まだ痛む鼻を右前足でさすりつつ、俺は立ち上がってスピッツの方へ振り返った。

「大丈夫！大丈夫！平気、平気！」

俺は強がって、というより彼女を安心させる為に無理矢理笑顔を作ると、ピョンピョンとその場でジャンプしてみせた。気の所為か、彼女もクスッと笑ったようだ。

俺はスピッツの女の子の元にそっと歩み寄ると、

「君こそ大丈夫？怪我をしてない？」

と彼女に一応訊ねた。はつきり言って傷一つ見当たらなかったから平気だろうとも思ったが、念の為だ。

「あつ……、大丈夫です。」

そう口にしたものの、何故か彼女は俺から顔を背けるように俯いた。その様子を見て俺は、大丈夫なのか？そう言って本当は苦しいのか？それとも単に俺の顔を見たくないだけか？と両方の可能性を疑ったが、何方にせよ何となく小馬鹿にされているようで気分が悪

かった。

まあ、何だ……。本人が大丈夫と言っているのだから何の問題も無かるう。俺はムツクの所へ行こうと彼女に背を向けた。

その時、

「あ……。あの……。」

と、またスピッツの雌犬から声を掛けられたから、何だろうか？と不思議に思いつつも俺は彼女の方へ振り返った。

「名前……。あなたの名前、何ていうの？」

「名乗る程の名じゃないよ。ごめんね。俺、今急いでいるんだ。じやあね！」

「あつ……。！」

彼女が何かを発し掛けた気がしたものの、構わず俺は下り階段へ向かって駆け出そうとした。しかし……。

「カイト！そこで何をしているの？！すぐに戻って来なさい！」

と叫ぶ、廊下中に響く位大きな美久の声と、調教訓練用ホイッスルのピ　　ッ！とけたたましく鳴る音を俺の耳が捕らえた。

風紀委員室のある方へ目を向けると、委員室の開いた扉の隙間から上半身を出して此方を見つめている美久とばっちり目が合った。

何の用事かは知らぬ存ぜぬだが、見つかってしまつては仕方がない。俺はお外で遊ぶ事は諦めて、風紀委員室へと引き返した。

左足で押さえるようにドアを開けたまま、しゃがんで両手を伸ばして待ち構えていた美久の腕の中に俺は飛び込んだ。

俺を抱き締めた美久が立ち上がって、扉を閉めて部屋の中に入ろうとした瞬間、部屋の奥で麗美と雑談していた柑奈が、美久に声を掛けてきた。

「ねえ、ウチのムツク知らない？」

「さあ……。」

「外のグラウンドにいるよ！」

美久は首を捻ったが、俺はムックとさつきグラウンドで遊ぶ筈だったばかりなので、鼻先をドアの方へ向けてワンワンと吠えて教えて上げた。

程なくして、ホイッスルで強制的に呼び戻されたムックも風紀委員室へ帰ってきた。

特にやる事も無いので暇で仕方がないが、騒ぐ訳にもいかないし、外で遊ぶ訳にもいかないようだ。退屈だな……。俺は俯せで床に伏せると、

「ふわわ〜ん。」

と欠伸を出してしまった。何だか凄く眠気がする。

あまりにも暇過ぎるので、俺は一人で『自動車教習』っこをしで遊ぶ事にした。何て事はない、さつきと同じ様に10分の1サイズの色々なサイズの車に変身し、机の脚や鞆等、部屋の中にある色々な障害物を利用して、S字や車庫入れの練習を黙々と一向繰り返し。

何故そんな事をするのか？と犬仲間からもよく疑問を投げ掛けられるが、勿論こういう事を反復して修練するには、ちゃんとした理由がある。俺達魔犬は自動車に変身すると、前方とサイドミラーから見える範囲しか視認する事が出来なくなってしまうのだ。自分の左右と真後ろを視する事が全く出来なくなってしまうのである。だからこそ、限られた視界と耳から入る情報と勘から周囲の状況を的確に判断し、大きな車体を取り回せなければいけないのである。魔犬だから、自動車としては未登録だからと言って事故を起こしていい訳ではないからだ。

俺は100系マーク？の精巧な模型に変身すると、静かに、そしてゆっくりと部屋の中を走り始めた。

人々や魔獣達が行き来する部屋の中を、ぶつからないようにタイ

ミングを図りながらグルグルと回り、徐々に速度を上げて行く。

ドリフト走行を一度もせず、グリップだけに頼りつつ際どい所で学生達が足に履いた靴を避け、自分の車幅とほぼ同じ隙間を減速せずに通過する。それだけでもヒヤツとする場面が多いのに、前方に視点を固定したままりバス走行で同じ事を再びやる。嫌でも勘が冴えるというものだ。

普通の乗用車だけではない、大きなバスやトラックの模型や、時には軽自動車のそれにも変身して同様の事をし、車種や車格による挙動の違いを頭に叩き込んで行くのである。

「風紀委員長はいますか！」

と叫ぶ威勢のいい声と共に、風紀委員室の扉がバタンツと勢い良く開け放たれた。

トラックの姿を解いて、誰だろうか？と身構えていると、犬や猫を一匹ずつ胸に抱いた3人の女学生がカツカツと床を鳴らしながら闊歩して部屋の中へ入ってきた。

先陣を切っているのは、二重瞼の癖に三白眼の、険しいオーラを纏っている、大きく胸が張って腰が括れている、スタイルの良い眼鏡を掛けた面長で鼻筋の通った、薄っすらと茶掛かった長い黒髪をポニーテールにした、ハツと息を呑む程の美少女である。

その少女の容姿の伶俐な美しさにも驚いたが、彼女が大切そうに胸に抱く魔犬を見て、俺は目を丸くした。さっき廊下で危うく衝突しかけた黄金色のスピッツの雌犬である。

彼女の方も俺を発見したのだろう、前足を彼女の飼い主の右腕に掛け、上半身をグツと乗り出すと、

「あつ！カイト君だ！」

と、開口一番そう言った。

何でお前、俺の名前を知っているのだ？と一寸度肝を抜かれたが、よく思い出したら、先刻美久が俺を呼び戻す時に思い切り俺の名を大声で呼んでいたのだっけ……。

そう自己完結で納得しつつも、やはり氏名すら知らない赤の他人、否他犬に親しげに自分の名前を呼ばれるのは癪に障る、というより何処か歯痒いものがある。何だろう、この気持は……。向こうが自分の事を多少なりとも知っているのに、自分の方は一切相手の素性が不明である。そう云う一種の疎外感とでも表現しようか。何とも言えぬ複雑な気分である。

何より厄介なのは、普段は大きくて愛らしいだろう彼女の目が真っ直ぐ俺を捕らえ、その瞳が不気味な位爛々と輝いている事だろう。その悍ましさ故に、俺は彼女の眼から視線を逸らす事が出来ず、ただ凝視した。

さて、どうしたものか……。と思索している所に誰かが俺の左肩の上に前足を置いた感覚がして、俺はこれ幸いと顔を左に向けた。……ムックだった。何か良からぬ事を考えているのか、ニタニタと嫌な笑いをその顔に浮かべている。

「な……、何だよ？気持ち悪いな。」

「いやあ、カイト。お前も隅に置けないなあ！この、この……。」
思わず反射的に仰け反った俺に更に近付くと、ムックは右の前足の指でツンツンと俺の鼻先を突付いた。

「いつの間にか、あんな可愛い娘と……。なあ、何て言う名前なんだよ？あの娘。」

こいつ、あれが俺の彼女（のような者）だと勘違いしているな。俺は直ぐ様首を横に振って、

「いや、彼女じゃないよ。名前だって知らないもの。」
と否定した。

すると、話を聞きつけたルカ姐さんが俺達の会話に割り込んでき

た。

「あら何、カイト。あなた、あの娘の名前も知らないの？ 凄く親しそうなのに。冗談も程々にしなさいな。」

やはり女性の方はこういう色恋話が好きなのか、普段は済ましている姐さんがやけに乗り気で話に参加したので、俺は些か驚いてしまった。

「いや、いや！ 親しいも何も。さっき廊下で危うく衝突しそうになった……、っていうだけで、俺は彼女とは何の面識もありませんよ。姐さん。」

「でも、彼女、あなたの名前を知っているじゃない。本当に面識がないの？」

「彼女が俺の名前を知っているのは、多分、その場でマスターが俺を大声で呼び戻したからですよ。」

「以前会った事があるとか、忘れていたとかはなくて？」

「断じて無いです！」

「そうなの？」

唾が飛びまくる程の勢いで滅多矢鱈と捲し立てた俺と、未だ恍惚とした表情で俺を見下ろすスピッツ犬を交互に眺めながら、ルカ姐さんは怪訝そうに首を傾げた。

「とてもそうは思えないけれど……。」

「おいおい、見損なっただけ、相棒！ 女を惚れさせて於いて白を切るなんて。そんな卑怯者、漢の風上にも置けないぜ！」

ムツクからもそう責め立てられて、俺は酷く閉口した。

「ねえ、ねえ、そのジヤーマン・スピッツちゃん。」

俺と話していても埒が明かないと思っただのか、ルカ姐さんはスピッツの少女の方を仰視し、彼女に話し掛けた。

「あなた、お名前は何て言うの？ お年は幾つ？」

スピッツの女の子は、ちらりとルカ姐さんの方を見下ろすと、元気な可愛い声でこう答えた。

「アイリーンです。4歳になります。」

「そう……。ねえ、アイリーン。この子……。」

と、ルカ姉は左の前足で俺の頭頂部を軽く叩いた。

「……の何処が気に入ったの？薄情な事に、この子どうして自分があなたに好かれているのか全然解っていないらしいから、あなたから教えて上げて。」

時々ルカ姐さんは明るい笑顔で楽しそうにとんでもない事を口にする。そう、今この時のように……。もう嫌だ。何この公開処刑？ただでさえピリピリと張り詰めているのに、アイリーンの返答次第では此方の精神的なダメージの度合いも半端無いのですが……。

ただ、俺もアイリーンが何故俺を気に入った（？）のか何となく気に掛かる。それはムックもルカ姐さんも同じらしい。俺達は一勢に彼女の方を仰ぎ見た。

アイリーンは少し頬を赤らめつつもじもじと前足を擦り合わせて俯いていたが、遂にその口を開いた。

「だって、カイトさんは……。わたしを庇ってくれた素敵な王子様ですもの……。」

「……………?」

二の句が継げない、どころか体が硬直して動かない。冗談抜きで場の空気が凍りついてた。アイリーンのあまりに明後日な返答に、脱力し過ぎて熱が一気に冷めたと言い換えてもいいかもしれない。

何だよ？それ……。というのが俺の正直な感想だった。真面目に聞いた事が馬鹿馬鹿しくなった。

第一、王子様の部分は不問にしても、俺はアイリーンを庇った事は一度たりとも無い。俺の動線上にいきなり飛び出して来た彼女と衝突する事態を避ける為に、全力で危機回避行動を取っただけである。そもそもムックと競争などせず、あの階段との交差点の手前で一時停止をして左右の確認を怠らなければ、彼女とぶつかり

そうになるという事も起きなかった筈だ。責められる事こそあれ、惚れられる謂れはない。

「あら、この子達、急に静かになりましたわね。」

「本当だわ。さっきまでワンワンキャンキャン五月蠅かったのに……。」

頭上から声が聞こえてくる。見上げるとマスター達が不思議そうに俺達を俯瞰していた。所詮、彼女らは人間。俺達魔獣の言葉は判らない。当然、さっきまでの雑談も彼らにとつたら、犬がいきなりワンワンと盛んに吠え始めたと思っただけに黙り込んだという不気味な現象として認識された筈だ。

「では、そういう事をお願いします。」

「はい、では……、生徒会長に良くお伝え下さい。」

「はい、分かりました。それでは……。」
どうやら、人間同士の打ち合わせも終わったらしい。アイリーンのマスターは踵を返し、俺達から背を向けようとした。

その時、マスターの腕に抱かれたままのアイリーンが去り際に俺にこう声を掛けた。

「じゃあね、ダーリン。また会いましょう!」

「あら、アイリーン。またどうしたの? 全くどうしたのかしら……。さっきから変よ。普段は良い娘なのに……。」

ガタンツと扉が閉まって彼女らが居なくなつた後も、何となく余韻のような妙な感じがして、俺は困惑していた。もう勝手にしてくれ。

「でさあ……。」

唐突にムックが口を開いた。

「カイト、お前、どうするんだよ?」

「何を?」

「彼女の事を、さ。」

「彼女の事ね……。」

俺は溜息を吐いた。

「なあ、ムック……。お前ならどうするんだよ？」

「別に良いんじゃないかねえか？可愛いし。」

「可愛いねえ……。」

確かにアイリーンは可愛い。恋人であれば嘸かし他の雄共に自慢できるだろう。

だがしかし、である。ただ単によけ損ねて自爆した男を、自分を庇ってくれた王子様と盛大に勘違いするような女を恋人にしたいかと訊かれれば即答しかねるといふものである。あくまでも個人的な偏見ではあるけれども、ああいう惚れっぽい女の子って、他の男にも簡単に靡きそうな気がするのだよな。

まあ、何だ……。その内何かの拍子にああいう感じで他の奴も好きになって求愛するのだろう。少なくとも彼女にするのは御免だし、一夜限りの関係を結ぶとしても、一応風紀委員の使い魔として取り締まる立場に立っている以上、そういう事はしたくない。

まあ、成り行きに任せよう。そう俺は思う事にした。

そんな事を考えていると、ブオオオオオオオン……という轟音と共に、沢山の何かの集団が風紀委員室の前の廊下を走り去って行ったのを感じた。どうせ、変身能力を持つ魔犬や魔猫が、10分の1サイズ位の車の玩具に変身して廊下を集団暴走しているのだろう。最近ではよくある事だった。

人間同士のトラブルに対応するのが人間の風紀委員の役目なら、魔獣や超常現象絡みの案件に対処するのが俺達使い魔の役目である。特に暴走事件や凶悪事件等の緊急を要する案件は、パトカーに変身する事が得意な俺の専門だ。

「カイト、行きます。」

皆にそう言って扉を潜って廊下へ出ると、俺は10分の1サイズの、プッシュバンパーが前後に付いたフォード・クラウンヴィクトリアの白黒パトカーに変身すると、

「ウ　　ッ！」

とサイレンを鳴らして走りだした。

第三話：俺の狩獵

>>カイト

猪に出会った。

新校舎の1階の廊下を90系マーク？の覆面パトカー（何故かVIP仕様）の玩具に変身した状態で、パトロールも兼ねて散歩していると、どす黒い焦げ茶色をした体長2m位の大きな猪が我物顔で闊歩しているのに出会った。どうやら近くの山か何処からかやって来て迷い込んだらしい。

既にその存在に気が付いた生徒や職員が居たのか、教室のドアや防火壁を閉めた上に障壁魔法まで掛けて教室の中に引き籠もったり建物の外に避難したりして、廊下は既に閑古鳥が鳴いている。居るのはただ、何か不穏な唸り声を上げる猪と、思念波を風紀委員室にいる仲間の魔獣に飛ばして緊急応援を出し、それに正面から向かい合った俺だけである。

取り敢えず、邪魔な上に怖いから、猪を追い払う事にする。

車の天井付いたカバーを捲って赤く明滅するLEDの反転灯を灯し、ヘッドライトやフォグランプも、果てはハザードランプやグリルの中に仕込んだ赤色の点滅式前面警告灯も含めて全ての灯火を点灯し、サイレンとクラクションを鳴らして威嚇してみた。

「ウ　　ッ！ビツビツビツビ　　！どっか行け！

……フゴツ！？おわわ……！」

調子に乗って挑発したら、猪に鼻で鼻先を思い切り弾かれ、あまりの痛さに驚いた俺は思わずバックランプを点けて後退した。

後から思えば、この時猪の迫力にビビって後ろへ下がってしまった事が行けなかった。奴め、俺が後退した分だけ余計に前進し、ま

「でも、俺達。こんな感じで後ろ歩きするの、苦手なんだけれど……。」
大っぴらに言わないが、ムックとゴンもジャックの言う事に消極的に賛同しているようだ。たくっ、使えない奴らめ！
「ああ、じゃあ戻っている！ここは全部俺が引き受ける！」
俺は前照灯をハイからロービームに落とし、猪に向かって不規則にパッシングしつつ後方部隊に命令した。

しかしながら、後ろの連中は動く気配がない。

「どうした？これは俺一人で片付けておくから、お前らはもう帰っていいよ。」

と声を掛けると、ゴンが情けない声を上げてこう答えた。

「いやあ、我々も、仕事している、って実績を作らなくちゃいけませんから。」

「お前は何処の官僚だ！？」
もういい、勝手にしろ。

「あ、カイト君だ！カイトくん！」

突然遙か後ろからアイリーンの嬌声が聞こえたので、俺は嫌な予感と共に身震いした。そしてその後数秒も経たぬ間に、俺は彼女に思い切り体当たりを食らってつんのめった。

「ゲボっ！……な、何するんだよ?!」

俺は背中に押し掛かっているアイリーンに向かって抗議した。冗談抜きで猪の前足の爪に衝突するところだったぞ！

ところがアイリーンの奴、反省している様子がこれっぽっちもないらしい。

「え〜！何で？いいじゃない。」

「いや、いや！空気読んでよ！というか、前を見る！前を！」

彼女の目に猪が入っている事は考察するまでもなく明白だったが、

アイリーンは俺の背中の上から頑なに退こうとしなかった。どうやら彼女の瞳は、死角にある物どころか、視覚で捉えている筈の物でも自分にとつて都合が悪ければ映らなくなる特殊な物らしい。

しかし、邪魔な物は邪魔だ。俺はアイリーンに懇願した。

「頼む、アイリーン。ここは危ないから、君は向こうへ退避してくれ！」

「嫌だわ！」

「お願いだから良い娘だから、俺の言う事を聞いてくれ。じゃないと俺は公務執行妨害の現行犯で君を拘束しなきゃならなくなる。」

「わかったわ……。」

そうしおらしく呟くと、アイリーンは俺から離れた。おや？こいつも案外素直な所があるではないか！

そう、思わず感心しかけたが、次の彼女の言葉で俺はそうそうに前言を翻す事にした。

「それじゃあ、代わりに今度、わたしをデートに連れって行ってよ！」

「ああ?!」

何を言っているのだ、この女は……。唐突に支離滅裂な事を口にし始めたぞ。何で仕事を妨害されたから怒ったのに、代わりにこいつとデートしなければいけないのだ？こいつ、頭がおかしいのか？それとも俺の感覚の方が世間と掛け離れているのか？

兎に角、鬱陶しい者は去った。俺は改めてリバーズ走行を開始した。

「はい、お〜らい！お〜らい！猪さん、此方ですよ〜！」

猪を宥めながら、廊下を後ろ歩きで進む。やがてエントランスに辿り着いたのか靴箱が整列した広い空間に通リ掛かった。

俺はムック達と離れ、その靴箱と靴箱の間に出来た通路の一つにハンドルを左に切って右折し、猪を誘き寄せると、一気にバックス

ピンターンを決めて車体の前後を引つ繰り返し、リアタイヤをホイールスピンさせて砂埃を上げつつ急加速し、追い掛けて来た猪共々校舎の外へ飛び出した。

そして黒いアスファルトで舗装された校庭の上に躍り出ると、俺は玩具の車から実寸大の本物へと巨大化し、素早くスピンターンをして猪に真っ向から向かい合い、そのまま突撃した。

急発進したからだろうか、猪は吹っ飛ばされた拳句背中から俺のボンネットに叩きつけられると、そのまま弾んで屋根の上に飛び、最後には1.5m強の高さからアスファルトに落下して血達磨になりながら転がっていった。

死んだかと思ったが、まだ息をしている気配がする。下手に手負いした獣が暴れられても厄介だ。手負い猪という言葉もある。それに激痛に苛まれているだろう、可哀想だ。安らかに眠れるように気持ち良く止めを刺してやろう。

明日の給食には猪肉でも振る舞われるのかな……。そう期待しながら俺はバックランプを白く灯し、フルスロットルでアクセルを踏み込んだ。

第四話：俺の散髪

>>カイト

「そろそろ夏毛に生え変わる頃よねえ……。」

美久がそう呟いた途端、俺はビクリツと思わず前進の毛を逆立たせた。嫌な予感しかない。

「今度の土曜日に予約して美容院へ連れて行って上げなくちゃね。カイト！」

予感的中……。諦観のあまり俺は心の中で嘆息した。

別に美容院へ行く事自体が嫌いな訳ではない。行きつけの美容師さんは少しおネエキャラじみた変な小父さんだけれども、腕は信頼に値する人だし、他のスタッフもそんな小父さんの目に適った腕の立つ猛者ばかりである。それに赤ん坊ではあるまいし刃物に抵抗感がある訳でもないし前述の理由で毛を切る事に恐怖症も持っていない。寧ろ毛を切ったらさっぱりするし、美久の趣味とは云えお洒落も出来るし、シャワーを浴びてすっきりするから美容院へ行くのは好きな方だ。

だが、この時期に美容院へ連れて行かれるのは大嫌いだ。何故か？つて、禿げるからさ。

俺達のような、北ヨーロッパやアラスカや北日本等の、北部の寒い地方で産まれた犬は年に2回、春先と秋の終わりに、冬毛から夏毛、夏毛から冬毛へと体毛が全て入れ替わる。最近では空調機器の進歩の恩恵にあやかり過ぎて冬毛から夏毛に生え変わらない軟弱者も居るらしいが、俺は何だかんだと屋外で過ごす事が結構あるので、そこは心配ない。その代わり、抜けた毛がそこらいつぱいに散らかりまくって綿埃の溜まる元凶となってしまう。

そうして部屋が汚れるのが美久にとっては非常に不快な事らしく、

毎年2回、この時期には美容院へ強制送還され、電動バリカンによって地肌を露出する状態、所謂『禿』にさせられるのである。

犬用の鋭くて柔らかい刃のそれとはいえ、俺達犬は人間と違って肌がデリケートだから、地肌が直に晒されるのはあまり心地良いものではない、大変不快だ。

しかも俺の場合、全身の毛を丸刈りされたら、毛がフサフサしてもふもふとした可愛い容姿が一変してブルテリアのような間抜け面を衆目に晒す事になる。はっきり言って恥ずかしい。

人間からしたら毛を刈って無くしてしまえば部屋を汚さずに済んで都合が良いのだろうが、年に二回定期的に禿になる事を強要される此方としては堪ったものではない。

とは云うものの、まさか罷り間違っても使い魔の俺がマスターに逆らえる訳もなく、週末に美容院へ送り込まれた。

ちよつと女つばい言動が目立つ、立派な鼻髭を生やしたダンディーで筋骨隆々のバイセクシャルな中高年の店長と、その同い年の美人妻、そして彼らの男前な長男と母親似の長女、及び数人のスタッフが常駐する、青山界隈の素敵な街並みの雰囲気によく溶け込んだ小洒落たペット専用の美容院である。

まあジタバタした所で仕方がない。今が辛くても、きっと夏毛が生え揃えばきつと見られる物になる。それまでの辛抱だ。あれ、何だろう？目から汗が……。

「じゃあ、お願いします。」

「はい、じゃあお預かりしますね。」

美久の柔らかい胸の中から店長のがつしりした腕の中に抱かれ、クリーニング店のアイロン台か大型工作機械の作業台を彷彿させるトリミング専用の台座の上に降ろされる。

さあ、このままトリミングならぬ丸刈りにされるのかと息を飲ん

で待ち構えていると、店長のおじさんはそのまま台を離れ、隣の台で別の女性スタッフによってトリミングを終えたプードルを洗う為にシャワー台の方へ行ってしまった。

しかし、隣に居た奴を連れて行く間際、店長が一人のスタッフにこう声を掛けたのを俺は聞き逃さなかった。

「じゃあ、香苗ちゃん。5番台の、あそこにいる女の子のテリアの子、お願いね。」

「は、はい！店長！」

「やだ。心配しなくても大丈夫よ。あの子、ウチに来る子達の中でも一番大人しい子だから。落ち着いてやれば香苗ちゃんでも出来るわ。」

え？何？と些か不穏な空気をひしひしと感じて心細くなっていると、俺の傍らに一人の若い女のスタッフが立っている事に気が付いた。

緩やかにカールした髪量の多い茶髪のロングヘアの、程好く膨らんだ形の良い胸元が際立った、庇護欲を憐る小動物のような雰囲気纏った背の低い女性だった。ここに数ヶ月に一度のペースで通い始めて4年以上になるが、初めて見る顔である。

「お姉さん、誰？」

「あら？……あれ？」

俺が鳴いたのとほぼ同時に美久が戸惑ったような声を上げると、その女性は俺の御主人の方に顔を向け、頬を紅潮しつつニコリと微笑んだ。

「初めまして。今日からトリミングスタッフとしてデビューする事になったんです。宜しくお願いします。」

ほんわかとして、口調も丁寧な穏やかそうなお姉さんだが、その何とも表現し難い緩い雰囲気却在て俺の不安を煽ぐ。前世から脈々と受け継ぐ直感的な経験上、こういう人に刃物を持たせてはいけない気がする。ましてやその切る対象は罷り間違えば血みどろにな

つて命を落としかねない生物である。心の奥底から強烈な警報音が鳴り響き、俺の本能が『逃げる！』と必死に促している感じがしたが、足が竦んで動けない。丁度普通の人の腰辺りの高さがあるこの台は、子供の小型犬の俺が飛び降りるには高過ぎた。

「それじゃあ、始めますよ〜」

そんな、まるでばかばかと暖かい陽の光が燦々と降り注ぐ彩り豊かなお花畑の中に居るようなのんびりした声と共に、ブイイイイイイイン……と処刑の時を告げる電動カミソリのモーター音がゆっくりと近付いて来た。もう内心大混乱で冷や汗が出っ放しである。滝のように体を伝って滴り落ちてきた汗が、失禁したのかと思わず目を疑う程の水溜まりを俺の足元で作り上げていた。

ブイイイイイイイン……バリバリバリバリ……！

「ぎゃあああああああああああああああああああ！痛い
いいいいいいい！痛いよ ！お母さ ん、美久 ！うわ
ああああああああん！」

バリカンの網目状の外刃が身体に接触するや否や、激しく細やかに往復する内刃に毛ごと皮膚が巻き込まれ、摩り下ろすようにズタズタに切り裂かれた瞬間、あまりの激痛から俺は号泣しながら断末魔の声を上げて身を振った。そして泣き喚けば喚く程、地肌が鋭い刃物によって傷付けられていく。無間地獄で阿鼻叫喚とはいかないまでも、絶対トラウマになるだろこれ、とぼんやりと遠のく意識の中で俺は考えた。

体表中の至る所に出来た切り傷に無理矢理軟膏を塗り込まれ、それによる激痛でまたまた失神し掛けて青息吐息になりつつ俺は洗面台の上に放り込まれた。まるで最期の時を告げるかのようにズルズルと擦れる音を上げながら黒いシャワーヘッドの鎌首が持ち上がる。

表皮にある全ての汗腺から吹き上がる冷や汗が傷口を舐めている。そのヒリヒリと震えるような痛みが、更に俺の恐怖心を増大させる。

「は い。それじゃあ、シャワーを浴びましょうね。」

「止めてええええええ！やだあああああああ！」

人の所業とはとても思えない無情な宣告と共に黒い影が俺を覆い、シャワーヘッドのポツポツと穴の空いた湯が出る部分が向けられる。キャンキャンと泣き叫ぶが、犬の鳴き声を人間が解する事が出来る訳もない。

お姉さんの手がシャワーの蛇口に伸びる。

キュルリ……シャアアアアアアア……。

「ギアアアアアアアアアア！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛いよー！」

暖かいお湯が身体に掛かった瞬間、超高压電流が頭から尻尾まで走ったような言語に絶する痺れを伴った痛みが襲い、俺は七転八倒して自分でも有り得ないと思った程天高く飛び上がった。

そして運良く洗面台から店の床の上に叩きつけられた俺は、四苦八苦して意識が朦朧としたまま、当てずっぽうで脇目も振らず出口に向かって駈け出した。

「あ、ちよつと待って！」

「カイト！待ちなさい！」

後ろから女性二人の声が追い掛けて来るが知った事ではない。これ以上こんな所にいたら本当に死んでしまう！

運良く店の出入り口の傍まで辿り着くと、幸運かな、茶色いミニチュアダックスフントを連れてどこか上品そうな年配のご婦人が、表通りから店内へ入って来るに当たってドアを30cm位開けた。

無論、ぼんやりとした視界の中でもそれを認識した俺は、これ幸いとドアの隙間に飛び込んで表通りの歩道へ躍り出た。

そして、そのまま車道を通って逃走する為、俺は素早く銀色のビ
ユイック・ルサーンに変身するとそのまま道路の上に踊りで……。
ガタンツ！と言う衝撃と痛覚が俺を襲った。どうやらたまたま通
り掛かったミニバンと左側面と正面のオフセットで衝突事故を起こ
してしまったらしい。

思わぬ止めを刺されて、今度こそ俺は気絶した。

目を覚ますと、自分に大きくて濃い黒い影が覆い被さっている事
にすぐに気が付いた。見上げると、見覚えのある白と茶色の斑の巨
大な体躯の大人の雄のセントバーナードが心配そうに俺を見下ろし
ていた。

「え……え　　つと……。」

「気付いたようだな……。坊主。」

俺がよろよろと起き上がると、そのセントバーナードのおっさん
は徐に口を開いた。見掛けの年齢相応に低くて少し曇った渋い声が、
子供の俺には及びも付かぬような経験と含蓄をその内包に察せさせ
る。

周りを見ると、昼間なのに薄暗くて狭い、所々に中の物が地面ま
で溢れ出た大きなバケツのような青いゴミ箱が置かれている汚い路
地の中間辺りにいる、と云う事が臆気ながらも認識された。どうや
ら先程の車道の上からこの雄犬によって雑居ビルと雑居ビルの間の
隙間のようなこの場所まで運び込まれたらしい。

俺が地べたにちょこんと座ると、そのセントバーナードはこう自
己紹介した。

「俺はこの辺りの魔犬共の顔役をやっているセントバーナードの吾
朗という者だ。お前もウチのマスターの店でトリミングをしている
常連なら見た事はあるだろう。な、カイト。」

ああ、そつだ。何処かで見た事があると思ったら、さっき逃亡し

てきた美容院のオネエ系店主の一家の飼い犬ではないか……。そう
気付いた途端、何故か俺は安心して座り込んでしまった。

吾朗さんは、俺のすぐ傍に頭を接近させると、赤く滲んだ線のよ
うな切り傷をそつと舐めた。まだ疼く傷周りの皮膚にヒリヒリとし
た痛覚を感じ、俺は思わず身悶えた。

「まだ、痛むかい？」

「は……はい。」

「すまん……。」

そう、突然静かに吾朗さんが呟いたので、何故この人は俺に謝っ
ているのだろう、と俺は内心首を傾げた。寧ろ、そのまま轢き殺さ
れてもおかしくなかった場所から俺を救ってくれたのは他ならぬ彼
である。俺が彼に感謝しこそすれ、彼の方から謝罪される謂れはな
いし、いくら自分のマスターの所で起こった事故だといえ、直接関
わっていた訳ではない彼の謝辞を受け取っても、それはそれで反応
に困るし、強く文句を言えなくなってしまふ。

そんな俺の困惑を余所に、吾朗は話し続ける。

「あの娘も、悪気があつた訳じゃないんだ……。ただ、ちよつとだ
け不器用でな……。」

ちよつと不器用ってレベルでは無かつたと思うが……。というか、
本当に悪意が無ければ、剃刀の刃が当たって血が出た時点で作業を
止めるだろ。常識的に考えて……。

そうクレームを付けたくて堪らなかつたが、本当に申し訳なさそ
うに此方を伏し目がちに見つめる彼の様子を凝視すると、喉元まで
出掛かった言葉が何故かつつかえてしまった。

「どうしようもないドジだが……、今日この時の為に一生懸命練習
はしていたんだよ。だから……、申し訳ないが今回は大目に見てや
つてくれないだろうか……。」

「は、はあ……。」

俯きながらもジツと俺を見据える吾朗さんの視線を浴びて、もし首を横に振ったらどうなるのだろうか？と不穩に思いつつ俺は頷いた。

「無論、ただでは言わん。それなりの償いは此方もさせて貰う。」

「……………」

「ところで、君はイベリコ豚のベーコンとかは嗜むかね？」

そう訊ねられて、俺は慌ててブンブンと首を横に振った。産まれて以来、その辺のスーパーマーケットでも簡単に手に入るようなドッグフードとかおやつなら食べさせて貰った事はあるが、そんな如何にも高そうな舶来品を振舞われた記憶は無い。

「俺の友人から礼として貰ったのだがね。何せ、大量に有るから独りじゃ食べきれなくてな…………。お詫びと言っては難だが、君にも少し分けてやるう。…………ついておいで。」

吾朗さんはそう言って俺から背を向けると、おいでおいでをするように尻尾を振り、白い光が細く眩しい柱を創る路地の出口へ向かってのっそりと歩き出した。

そして、もう20mも行けば表通りと云う所で急に立ち止まると、回れ右をし、丁度右側のビルの壁にある緑色の粗末な扉を、真鍮製の丸いドアノブに掛かっていた黒と黄色の斑の作業用ロープを啜えて引っ張るような感じで開け、内側に鬱蒼と広がる暗がりの中へ平然と入って行った。

「さあ、カイト君。君も入り給え。遠慮する事はない。」

「は、はあ…………。それではお言葉に甘えて…………。お邪魔します。」

此方を振り返って扉を押さえる五郎さんに促されるまま、俺もビルの中へ足を踏み入れた。

店の蛍光灯の白い光が薄っすらと入ってくるので目が慣れると段々周囲の様子が判る程度の明るさは保たれているものの、両側の棚にダンボール等が雑多と積まれた、廊下とも倉庫とも見当のつかない

い藍色の闇が覆い被さるその場所は、どうやら件の美容院のバックヤードのようだった。と同時に、急に立ち止まった吾郎さんの傍にある草臥れた緑色の毛織の毛布が中に敷かれた大型犬用の大きな犬小屋から鑑みて、彼の寝食の場でもあるらしい。

俺から見て奥の方、白い光が此方へと漏れでている店舗スペースの方から、

「カイト！カイト！」

と俺の名前を何度も連呼する、殆ど発狂しているとしか思えない美久の絶叫がガンガン響いてきている。

少し可哀想かな……、とも思いかけたが、俺は逃亡中である手前、自分からノコノコと彼女の前に現れるような真似はしなくなかった。母親と喧嘩をして家を飛び出した悪餓鬼が、不安と後悔で泣き叫びながら自分を探す彼女の姿を認めて心を痛めつつもその場から立ち去るように、ざまみろと軽侮し、ダンボールとダンボールの影にそつと身を潜めた。

別にイベリコ豚のベーコンとやらを御馳走になつてからでも遅くはないと、何故かその時は感じたのだ。マスターに途轍もない心配を掛けているという罪悪感など、微塵も感じなかった。

最低だな、俺って……。

吾郎さんは、犬小屋の毛布の中に鼻先を突っ込んで何かゴソゴソと音を立てると、5kgはあるうかと思われる肉の塊を取り出した。恐らくこの肉塊が噂の高級肉だろう。いくら防腐処理が生肉よりはある程度なされているベーコンとはいえ、こんな物をねぐらに持ち込んでいくバレなかつたものだ、と俺は心底感心した。同時に、こんな物を他犬からほいほい貰える五郎さんって何者なのだろう？と云う疑念も噴出する。

そんな俺の心境など関係なしに、吾郎さんはその肉を200gば

かし切り分けると、ホイと俺の足元に放り投げた。

「ほれ、食べ盛の子供だ。この位は食べられるだろう?」

「い、良いんですか?こんなに頂いて……。」

並外れた彼の気前の良さに、思わず俺は畏まって居住まいを正した。

「何、気にする事はない。この程度の物なら掃いて捨てる程あるからな。これだって同じベーコンの塊があと2つ3つあるからな。この位、君にやったところで大した事にはならんよ。遠慮せずに食べなさい。」

「は、はあ……。」

本当、何者なのだろう……、この人。

猜疑心からくる極度の緊張の所為で折角のお高いお肉をよく味わう事は出来なかったが、量が量だけに腹が満たされたので、何もかもがどうでも良くなった俺はその場で四つん這いになった。

泣きつかれたのかさつきから美久の悲鳴が途絶えたとし、散々な目にあつたとはいえずまらないプライドの為に隠れん坊をするのにも飽きたし、何よりも血が乾いて瘡蓋になって切り傷が治癒しかけている。もうそろそろ戻った方が良いだろう。

俺は立ち上がった。

「おや、もう行くのかね?」

俺が動いた気配に気付いたのか、吾朗さんも顔を上げた。

「ええ、御馳走様でした。」

「何、ほんの詫びの気持ちで俺なりに示しただけさ。……そこまで送ろう。」

そう言つて、吾朗さんは明かりが漏れ出る方向に向かって静かに歩き出し、俺も彼の後を追い掛けた。

明るい店舗の中に入ると、美久や店長一家、そして他のスタッフ

や客達も総出で集まり、想像以上の騒動に発展していたのを目の当たりにして、俺は心底仰天した。

すっかり意気消沈して生氣と云う物が感じられず、本当に抜け殻のようになつて呆然と椅子に座り込む美久の足元に近付くと、俺は鼻先を彼女の足首にチョンチョンと押し付け、キャンキャンと鳴いて彼女に自分の存在を訴えた。

「カイト……？」

頭上から美久の掠れた声が聞こえてきた。見上げると、目尻に涙の粒を浮かべて目を真つ赤に腫らした彼女が凝視するように俺を見下ろしているのが目に入る。

そして、美久が椅子から立ち上がって膝を曲げて床の上に腰を下ろした次の瞬間、唐突に彼女の両腕が伸びてきて、俺はガシツと彼女の胸の中に、これ以上になく力強く抱き締められた。

「カイト！カイト！……あなた、何処に行つていたの？事故に巻き込まれて死んだんじゃないかって、凄く心配したのよ！」

感極まつた美久がまた号泣し、

「良かった、良かった。」

等と周りの人達が騒ぎ立てる中、そこまで大げさに振舞わなくても良いではないかと思う嫌悪と、さっさと出てくれば良いものをしようもない羞恥心から愚図愚図と潜伏していたのは流石に無思慮が過ぎたか内省する後悔の間で、不貞腐れた俺は主人の腕の中からもぞもぞと上半身を這い出し、下を覗き込んだ。

美久の足元には、何時の間に近接していたのか、五郎さんが座つて俺を仰視していた。

「それじゃあな、カイト君。頼むから、これでトリミングを怖がる事なくウチに遊びに来てくれよ。今度はもっと凄い物を用意しておくからな！」

もつと『凄い物』とは何だろう？さっきまでの猛省は何処へやら、

美久に抱っこされて帰宅の途に着いた間中、俺はずっとその事ばかり考えていた。

週明け、魔獣の預かり所のプレイスペースで、禿な上に傷だらけ、おまけに額に大きく腫れた赤いたん瘤が出来た醜い体を極力隠すように、100系後期のチエイサーの模型に化けた拳句物陰に潜んだ俺は、ムックに向かって五郎さんの事を手短かに話して聞かせた。

ムックは珍しく黙って俺の話を傾聴していたが、俺が話を終わると溜息混じりにこういった。

「カイト、お前もつくづく残念な奴だなあ！折角稀有な御馳走を出して貰ったんだからよくよく味わってくれば良かったのに……。本当、勿体無いなあ。」

「無茶を云うなよ。ムック！」
と、俺も負けじと反論する。

「お前だって、あの時の俺と同じ状況に立たされたら、きっとそんな余裕なんて吹っ飛ばに決まっているさ。」

「どうしてそういう事が言える？」

「だって考えてみるよ。行きつけの店の飼い犬という以外はよく知らないおっさんに冗談ではなく馬鹿高い物を碗飯振舞されたら、普通不気味に思うだろうが！」

「どうして？お前はそこの家の従業員に、過失とは云え、傷害を被られたのだろう？慰謝料として考えたら正当な対価じゃないか？」

怪我をした事への引換としての慰謝料とか、嫌な言い方だな……。ムックの言葉を不愉快に感じたけれど、強いてそれを表に出さないように注意しつつ俺は彼との会話を続行した。

「そりやお前、仮にそうだったとしてもその慰謝料代わりの物の価値の度が過ぎているだろう？イベリコ豚のベーコンの塊200gだぞ！却って裏があるのではないかと怪訝に思うのは当然だろ。本当、怪しすぎて美味しい物も喉に通らなかつたよ！」

「何を言っているんだか……。結局は手前の腹の中に収めたんだろ

？」

「そこを突っ込むなよ。……というか、遠慮したら遠慮したでどうなるか判らないから、勧められた以上食べるしか無かったよ……。」

「しかし、その吾朗って犬、何者なんだろうな？」

「普通のおじさんでは無いと思うよ。何処かの犬からのお礼だと言つてベーコンの大きな塊を見せてくれた上に、同じものがもつと沢山あるって話していたもの。」

「なあ、カイト。そのおっさん、自分はこの辺りの顔役だ、って言うていたんだよなあ？」

「ああ。」

「じゃあ、そのおっさん、周辺の犬猫から謝礼や見ケレ料を分捕るヤクザの組長とか、そういう者じゃねえの？」

「魔犬に暴力団もヘチマもあるのか？」

「犬のお巡りさんという取り締まる奴が居るんだから、当然取り締まられる奴らだつて居るだろうよ。俺達だつてそうだろうが。」

「まあ、そう言えば、そうだけれどさ……。」

「ま、もしもシノギの犬なら極力必要以上に関わらない方が良くかもしれないな。」

「そうだねえ。君子危つきに何とやらとも言つものねえ……。」

そう答えて茶を濁したものの、果たしてその時に自分はちゃんと断れるだろうか？と不安に思うと共に、もつと凄い物は何かと期待に胸を膨らませる、そんな相反する気持ちを抱く俺が、確かにそこに居た。

第五話：俺とコーギー

>>カイト

「じゃあね、カイト。わたしが戻って来るまで、そこで良い子に待っているのよ。」

「解っていますよ。御主人！」

「いい？絶対に逃げようだなんて事を考えちゃ駄目よ？」

百も承知、二百も合点！そんな怖い顔で睨まないでよ。……とたじろぎつつ、俺は去って行く美久の後ろ姿を見送った。

休日の午後のショッピングモール。多くの主婦や家族連れで賑わう巨大な建物の正面口の傍、布ベルトや鎖を付ける為のステンレス製のポールに青いリードを結ばれて繋がれた俺は、少し橙色が混じった明るいベージュ色の煉瓦が敷かれた敷地内の道路の上に、四つん這いになって伏せた。

やる事も無いのでぼんやりと前を眺めると、両側に店が連なるショッピングモールの屋外通路を、まるで建物が一つの大きな生物だと錯覚させるかの様に、右に左に群集が往来し、俺から向かって左手にある入り口へと吸い込まれたり、逆にそとへと吐き出されたりしている。

最も、地下や上層部に立体駐車場を設けているものの、ショッピングモールといえど郊外や田舎にある広大な物ではなく、スーパーマーケットにデパート的な要素が付加した、所謂近郊型のそれであるから、建物や敷地自体がそこまで巨大である訳ではない。

それでも、食料品や日用品、工具や日曜大工の材料、ガーデニング用品、果ては各種服飾ブランド品までここ一箇所ですべて賄える所為か、この辺り一円の住民がわらわらと集って来るのだから、行き来する人の数も尋常ではない。なのに、然程大きそうに見えない、

精々500m四方もない上に実質2階分程しか店舗スペースを確保していないこの建物が、一日に何百人も食べたり吐いたりしている。そんな事を考えると、何とも不思議な事に思えてくる。

果たしてこの建物は、毎日何百人も丸呑みして金という栄養を搾り出し、消化し終えた絞り粕を排出する事に満足しているのか？それとも、自分が餌を独占する事で他の小さな生き物が絶滅の危機に瀕している事を少しでも申し訳ない、と案外良心の呵責に苛まれたりしているのだろうか？もしこの怪物に喋るという特殊技能があったならば、是非とも聞きたいものである。

6月が近付いている事もあり、その分日々気温が上昇して段々と暑苦しくなりつつある。だが、それでも陽気というのはまだ其処彼処に漂っているもので、俺は時折欠伸をしながらウトウトと瞼を下げて鼻提灯を膨らましていた。

警戒心など何処へやら……。ただでさえ愛くるしいと評判を得易い小型犬なのにほんわかとした雰囲気撒き散らしていると見ている者に安心感を与えるのか、時々通りすがりの通行人、特に女子供やお年寄り、が足を止めて俺の姿をじっと見下ろしていく。

「あ、お母さん。見て！ワンちゃん！」

「あら、本当。でも、ばつちいからあんまり触っちゃ駄目よ。マヤちゃん。」

「え　っ！？」

「え　っ、じゃないの。さ、行くわよ。」

不潔だなんてとんでもない。ちゃんと毎日お湯を浴びて清潔さを保っているぞ！と内心おばさんの方へ抗議しつつ、店の中に吸い込まれていく水色の幼稚園の制服を着た女の子とその母親らしき女性の親子連れを俺は見送った。

「あ　　ッ！ちよつとこれ見てよ。子犬がいる！」

「うわあ、ホントだ！ガチで可愛い！」

「マジで有り得ないんですけれど……………」

21世紀も早数十年過ぎようとしている現在に、茶髪に顔黒メイクにルーズソックスという、絵に描いたようなヤマンバギャルがこんな都会の真ん中に3匹も生存している事に驚愕しつつ、俺は自分を見下ろす女子高生らしき少女達を呆然と見上げた。

そんなこんなで、時々立ち止まる人間を観察しつつ人の往来を眺めていると、薄紫色のワンピースを着て鶯色の帽子を被った、眼鏡を掛けて髪を紫色に染めた上品な老婦人と、彼女の左手に握られた赤いリードによって引き連られた俺と同じ年位の子犬のウエルシュ・コーギー・ペンブロークのフォーン毛が俺の目の前を通り掛かった。老婦人は俺の繋がれたポールの更に建物に近い方の隣のポールに手にしていたリードをグルグルと巻きつけてコーギー犬を繋ぐと、去り際に彼女の犬に向かってこう言った。

「じゃあね、カミーユ。戻って来るまで、ここで少し待っていてね。」

「

アイサー、行ってらっしゃい！」

コーギーの方も心得ているのか、舌を出してはあはあと荒く息を吐きつつ、断尾されて無くなったのか尻尾など無いのに、まるでそれをブンブンと振っているかのように体を震わせている。

風が頬を撫ぜる。相変わらず目と鼻の先を多くの人が通り過ぎて行く。

隣に俺と同じ様に主人を待つ犬が来た。ただそれだけの事。それだけの赤の他犬だから、お互いに特に何も話し掛ける事が無い。

かのイギリスの故事成語に、

『もしも見知らぬ誰かと話す機会があったなら、天気の話をしな。』
『というような格言がある。皆が一樣に興味を示す話題、一致する意』

見など目の前の天候くらいしかない、という若干皮肉めいた言葉だ。しかし、そのお天気の話題すら、今は何の意味も無いように俺には感じられた。何故なら俺達の頭上には、雲ひとつ無い黄金色に輝く青空が何処までも広がっているのだから。

「いい天気ですね。」

「ですね。」

で会話が終了して余計に気不味くなるのが目に見えている。

人並みの間を縫うように吹き込む微風が心地良いので、俺は何時の間にか地面に頭を落とすと、そのまま瞼を瞑ってウトウトと眠りに就いてしまった。

「おい！」

声がする。

「む……………」

暗闇の中、俺は生返事をしてゴロリと寝返りを打った。

「おいつたら！」

「……………」

「お　い！」

「……………」

五月蠅いなあ。見れば判るだろ。寝ているのだよ。耳元でキャンキャン喚くな。

そう、イライラとしつつ頑として目を開けてやるかと瞼を閉じていると、今度はカプリとかなり強めに首筋の後ろを甘噛みされた。血は出ていないみたいだが痛いのは変わらない。俺は堪忍袋の緒が軽く切れた。

「おい、お前！何しているんだよ？痛いじゃないか！」

「五月蠅い！お前こそ、さっきから俺をシカトすんな！」

文句を言ったら、顔を真赤にして逆切れしやがった。だからコーギーは嫌いだ。賢いか何か知らんが文武両道の自信家で社交家の外

面を引つ提げている癖に、神経質で喧嘩早くて気性が荒い。その上どんな犬と交配してもその血を色濃く残しやがる。あまり親交は持ちたくない犬種だ。

「いや、シカトつて……。で、何だよ？」

俺は面倒臭いな、と思いつながらも見ず知らずのコーギー種の相手をしてやる事にした。俺達犬の世界には、ハスキーは話が解る、ドベルマンには逆らうな、といった犬種犬種毎にどう交流すれば適切かという常識がある。因みにコーギーは、相手の気が済むまでとことん付き合え、だ。

俺がぶつくさ言いつつ顔を向けると、余程嬉しかったのかそのコーギーはピョンとその場で飛び上がり、ハアハアと荒く息を吐いる。そして、唐突にこんな事を持ち掛けた。

「勝負しようぜ！」

「何を？」

そう、透かさず訊き返した俺に向かって続けられた奴の言葉に、俺は思わず我が耳を疑った。

「どっちが人間に可愛がれるか勝負だ！」

唖然として立ち尽くす俺を尻目に、コーギーは飛んだり跳ねたりして己をアピールさせながら盛んに通行人へ声を掛け始めた。

「ねえねえ、そのお姉さん。俺と遊んでいってよ！ねえったら。」

お前はしつこいナンパ男か、と突っ込みたくなる程しつこく女子高生らしき人間の清楚で可憐な少女3人組に向かって、コーギーは言い寄って飛び付こうとしている。言うまでもなく、どんなに犬の俺達が何かを訴えようと言葉を発してみた所で、犬語を解せる超能力者でもない限り人間の耳には『ワン』とか『キャン』とか『ワオーン』といった鳴き声にしか聞こえない。特に気性の荒いコーギー種の場合、あまりに捲くし立てると犬の苦手な人種からは余裕で敬遠される程の音量と吠え声に聞こえるだろう。ましてやあんな風

にジャンプすれば、襲われると咄嗟に誤解されても致し方ない。

「ちよつと！何？この犬！怖い！」

「行こう、行こう！近寄らない方がよいよ。」

と、慌ててコーギーから距離を取って避ける少女達を観察して、俺はそんな感慨に耽っていた。

すると、俺も居る事に気付いたのだらう、女子高生達は俺の方へ接近してきた。

「あら？ここにもワンちゃんがいる！」

「この子、さつきの子と違って大人しそうね。」

「モフモフしていて可愛い！」

染髪していない黒くサラサラした髪をなびかせた何処かお淑やかな少女達が、屈んで俺の顔を覗き込む。その瞬間、俺の中で出来心が芽生えた。そうだ、そのコーギーに可愛がられると云う事はどいう事なのか、この身を以って実践してやろう。

俺は態と後退りをし、少女達の顔を怯えたような表情で上目遣いに仰視するという芝居に打って出た。絶対に相手を怖がらせてはいけない。あくまで向こうより弱い存在と見せかけて下手に出て、彼らの母性や父性本能へ訴えなければならぬ。これが肝要だ。

「あら、この子。怯えてない？」

「大丈夫よ。怖くないからね。」

「ほ　ら、よしよし……。良い子、良い子。」

相手が気兼ねなく己の身体に触れてきたら、そこで初めて時期を見定め、此方からもアプローチを仕掛ける。

「お姉ちゃん、遊ぼ！遊ぼ！」

ここで、気を付けなければならぬのは、普通に大声で吠えては全てが泡沫に化してしまうという事である。話す時はクンクンと鼻声で、頬や鼻先をスリスリと擦り寄せて子犬らしく愛嬌を振舞わなければならぬ。

その上で、始終大人しくしておく事。態と少々馬鹿犬っぽくポケっとする事が可能なら、尚吉である。

こういう時、そこで指を啜えて俺を口惜しそうに睨むコーギーのように、悪意を以って睨んだり、吠え声を上げて威嚇したりしてはならない。

「ちよつと、あの犬。まだこっちを見てあんなに吠えているわ。」

「怖い……。」

「行きましょう。……それじゃあね、ワンちゃん！」

……と、こんな感じで逃げられてしまう。短気は損気とはよく言ったものである。

「なあ、あんまりそうした感じで吠え捲らない方が良いんじゃない？」

俺はコーギーの方へ向き直って彼に声を掛けた。

「俺達の言葉は人間には理解出来ないんだ。そんな風に大きな声を上げていたら、威嚇していると誤解されて却って逆効果だよ。避けられるのが落ちだぜ。現に逃げられたし……。」

「五月蠅い！」

折角善意から助言してやったのに、コーギー犬は俺に向かって烈火の如く顔を紅潮させて咆哮した。

「五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い！五月蠅い

！あ~~~~~もう！うるさい！」

そして、仰向けになって四肢でバタバタと宙を思いきり掻きなが

ら一通りジタバタと喚き散らすと、今度は、

「うわ

ん！」

と物凄い大声で号泣した。どうやら冗談抜きに本気で悔しがっていらしい。負けず嫌いというのも、往々にして難儀するものと見える。これに負ければ確実に死んでしまう程の犬生一大の大勝負ならいざ知らず、所詮上なんて見上げたところで切りが無いのだから、こんなしょうもない所で1度や2度位負けたって別に構わないではないか……。俺はそう思う。

しかし勝利への強迫観念とか抜きに、こういう奴って自分が上に立てないと我慢出来ないというか、自我が保てないのだろうな。そんな風に憐れに思いつつ、俺は自分とは違った意味で幼いコーギー犬をやや冷ややかに観察した。

そして、押して駄目ならば引いてみるという、初歩的な交渉力すら発揮出来ない彼をもどかしく感じた。

次はポケットの中に御摘みでも突っ込んでいそうな、黒いトレーナーの上から黄味掛かったカーキ色のナイロン生地ジャンパーを羽織り、青い長袖のジーンズと赤いスニーカーを履いた、小太りで年配な薄汚れた男性が俺達の傍を通り掛かり、建物の中へは入らずに傍まで近付いてきた。

コーギーも俺と同じ事を考えていたのだろう、そのおっさんの風貌に怪しい物を感じた俺は内心警戒しつつ、彼と共に黙ってその人を見上げていた。

逆光による陰になって窺い知れなかったが、おっさんはどうやら俺達を見下ろして笑っているようで、

「おう、ワン公か！」

と、不自然に思う程気さくな感じで俺達に話し掛けてきた。

「何だあ？留守番でもしとるのか？」

「……………」

「おう、そうかそうか……。偉いなあ。」

おっさんは、俺達が一言も喋っていないのにも関わらず、一人で納得したようにそう呟くと、

「ほれ、ご褒美だ！」

と、ジャンパーの左のポケットの中へ手を突っ込んでまさぐり、何か白っぽい拳大の塊を俺達のすぐ傍の地面の上へホイッと放り投げた。

それは、ビニールの包装にすら包まれていない、ぐちゃぐちゃに潰れて半分溶けかけたチーズ蒲鉾の丸まった物だった。そんな物を直に衣服へ突っ込んでいたおっさんにも吃驚だが、何よりもそれから漂ってくる胸が重くなるような異臭と、妙に笑顔な男の顔に怪訝を覚えた俺は、思わずコーギーと目を見合わせた。

おっさんがショッピングモールの建物の中へ消え去るの見計らっていたのか、コーギーが口を開いた。

「どうするよ？これ。」

どうすると言われても、こんな怪しい物は間違っても口に入れな
い方が無難だろう。知らない人から貰った物は食べてはいけません、
と美久も言っていた。

「食っちゃおうか。」

と、チーズ蒲鉾に差し迫るコーギーの黒い鼻と白い鼻先が見えたの
で、

「止めとけ。」

と、俺は即座に制止した。

「何か変な匂いがする。こんな物食べたら腹を壊すか、最悪死ぬぞ。」

「やっぱりそうかなあ……。」

「そうだって。あそこ、見てみるよ。」

俺はそう言っ、コーギーにショッピングモールの建物の中へ目を向けるように促した。そこには、ステンレスの冊子の鏡のように

綺麗な硝子戸の両開き式の自動ドアの陰から、そつと此方の様子をニタニタと不気味にせせら笑いつつ窺うおっさんの姿が、臍気ながらもしつかりと確認する事が出来た。

食べる事も捨てる事も出来ず呆然と蒲鉾の塊を2匹揃って見つめていると、突然バサツ……バサツ……と大きく轟く羽音と共に1匹の大きな灰色の土鳩が舞い降りて来た。

鳩は、エメラルドグリーンと紫水晶のような色を煌めかせる頭を前後にフリフリしつつ、鑑定士が見定めるような目でチーズ蒲鉾の周りをグルグルと回ると、

「クルツツ　！」

と軽妙な鳴き声を上げてからそれを足で掴んで何処へと飛び去ってしまった。おっさんの姿も何時の間にか見えなくなった。

しばらくすると、運動部の部活の帰りらしい、ナイロン製の青いのと白いのと、スポーツバッグをそれぞれ肩に掛けた中学生らしい少年2人組が、建物の方に向かって俺達の前を通り過ぎようとし、気が付いたのか俺達の前で立ち止まって顔を向けた。

だが、単に犬が2匹居る事に目が留まったただけであったのか、何も反応を示さずにそのまま立ち去ってしまった。

結局それから10分間、誰も俺達の前で留まる人は居らず、1：0のまま時間だけが無駄に過ぎていった。

コーギーは喧嘩っ早い割に飽きるのも人一倍早いのか、自分から勝負をふっかけて来た事も忘れて俺と同じように地面に寝そべって鼻提灯を垂らしている。別に望んで受けた挑戦では決して無いので有耶無耶になって結構なのだが、何だかなあ、と俺は溜飲下げぬ思いを感じつつコーギーの寝姿を見つめていた。

しかしながら、流石はコーギー。チワワとかトイプードルには負けるかもしれないが巷の人気犬。寝ている姿が可愛い所為か、時折

親に連れられた小さな子供達や若い女性が興味本位で彼の背中を掌で撫でていく。

だが悲しいかな。皮肉な事に、折角夢が叶っているというのに肝心の彼は夢の中。自分が結構な数の人々に可愛がられている、という事実を知り得ようがない。それを思うと、やっぱり俺は何とも言えない気持ちになってしまった。

一眠りしてコーギーも俺も頭が覚醒してきた頃、シヨップングモールの建物の奥から、両手にポリエチレンの白い買い物袋を手にした美久が現れた。

「あ、マスターだ！」

と、嬉しさの余りそう叫んで尻尾をバタバタと振っていると、

「え？あれがお前の御主人なの？」

と、コーギーが訊ねてきた。

「うん、そうだよ。」

と、俺が何気なく答えると、

「え　　っ！」

と仰天したように叫び、コーギーはまたしても背中を地面に押し付けるように引つ繰り返り、手足をバタバタと激しくばたつかせて騒ぎ出した。

「わああああああああん！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！いいな！」

何がそんなに羨ましがられる要素があるのか今一つ理解出来ず、俺はポカンと口を半開きに開けて暴れまわるコーギーを生暖かく見つめていた。

そりゃあ、確かに美久は若いし、器量だって鼻肩目ながら良い方だとは思うが、だからどうした！とも思うのである。

はつきり言つて、魔犬……特に俺達のような子犬にとっては、寝食を共にする御主人様は母親や父親とも言つても過言ではない存在である。だからコーギーが騒いでいる事は、

「お前の母ちゃん、若くて美人で羨ましい！」

と、地団駄を踏んでいる事と同義な訳で……。自分の母親を褒められるなら素直に喜べるが、母親を羨ましいと嫉妬されたつて反応に困るだけだろう。さもなければ、そんな相手をみつともない、と憐れむかの何れかだ。

やはり、人間から見ても異様に見えるのか、

「あら、何？この犬……。」

と、コーギーに颯め面しながら美久はステンレスのポールから青色のリードを解いて手に取った。

「さあ、カイト。行くわよ！」

「了解です。マスター。」

美久の掛け声に元気よく応えると、未だに悔しそうに負け惜しみな言葉を吐いて騒いでいるコーギー犬を尻目に、俺は自分のマスターと共にその場を後にした。

その後コーギーがどうしていたのか、俺は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8596x/>

異世界で魔犬な生活

2012年1月14日06時45分発行